

**書評**

塩尻和子著 『イスラーム文明とは何か—現代科学技術と文化の礎』

明石書店、2021年3月出版

田中友紀（中東地域研究家）

「イスラーム文明とは何か」。この壮大な問いに答えようと試みた書物は今までどれだけあったのだろうか。「イスラーム」ならびに「文明」というキーワードが題名に入っている学術書といえば、たとえば佐藤次高、鈴木董共編の『都市の文明イスラーム』、や小杉泰『イスラーム 文明と国家の形成—諸文明の起源 〈4〉』などが思い浮かぶ。

まず、『都市の文明イスラーム』では、佐藤、鈴木を含めたイスラームおよび中東地域研究の泰斗たちがイスラームの起源や国家形成の歴史を一通り解説したうえで、7世紀から16世紀初頭までにイスラーム政権の下で繁栄した都市や地域を歴史的視点から論じた。同書のプロローグで佐藤次高は、イスラームとは「すべての人間活動を規定する生活の指針（p19）」であり、その受容は「人々の政治や経済活動の形態を変え、社会生活の様式を一新するものだった（p19）」と言及し、「様式を一新」したイスラームそのものが「文明」であったことを指摘した。

小杉は、「イスラーム文明」という概念について最も深く議論を展開している。『イスラーム 文明と国家の形成』のなかで、小杉は「文明」の定義を「技術体系／テクノロジー」で特徴づけられるものだとし、さらにその技術体系には医学・薬学・天文学などの「理系の技術体系」と国家形成のための「社会運営の技術体系」があると整理した。そして、イスラーム誕生以後300年ほどの間に「理系の技術体系」と「社会運営の技術体系」がどのように展開していったのかを論じた。加えて、小杉はイスラーム文明が他の文明と異なり、同文明が「遊牧文化が持つ技術体系」を持ち合わせていることを指摘した。この遊牧文化が持つ技術体系によって、イスラームはアラビア半島から出て文化的霸権を広げることが可能となり、支配圏内ではイスラームという「文化」でしかなかつたものが、域外に進出することによって「文明」にまで発展していったという（p47）。

本書の著者である塩尻和子も、イスラーム神学思想の高名な研究者である。これまで、塩尻はムウタズイイラ派のアブドゥルジャッバール研究で名を馳せ、近年では、イスラームに対する偏見と誤解を解くべく精力的に執筆や講演活動を行っている。このたびの最新作の表紙には、植物を基調とした美しいアラベスク模様とペルシャの賢人イブン・スィーナーの肖像画が描かれているが、言わずと知れたイスラーム医学、哲学に通じた人物を表紙にもってきたことからも、塩尻がイスラーム文明の全体像を真正面から広く論じていこうという意気込みが垣間見えてくる。

本書は、2014年と2018年に塩尻がNHK文化センター青山教室や同文化センターさいたまスーパー

アリーナ教室で行った『イスラーム文明の伝播－近代科学技術と文化の源流』の内容をイスラーム文明の全容がわかるように加筆編集されたものである。同書は14章から構成されており、その章構成は以下となっている。

## はじめに

### 序章

- 第1章 イスラームとは何か
- 第2章 ギリシア科学の受容
- 第3章 ギリシア文明の継承と発展——大翻訳事業
- 第4章 イスラームのイベリア半島征服とヨーロッパへの伝播
- 第5章 商業活動の発展と航海技術
- 第6章 エレガンスと生活文化
- 第7章 錬金術、数学、天文学
- 第8章 医学者と哲学者
- 第9章 西洋中世哲学への影響
- 第10章 イスラーム芸術の世界——アラベスクと建築
- 第11章 十字軍の歴史とレコンキスタ
- 第12章 西洋の発展——脱イスラーム文明
- 第13章 イスラーム文明・近代文明の源流としての意義

本書の特徴は、イスラーム文明とは何かと「全体像」を示していること、さらに一般読者に向けて「平明」に説明していることである。塩尻は小杉のように「文明と文化の違いとは何か」という文明論的議論は行わず、「イスラーム文明とは、7世紀から17世紀にかけて、当時の世界で最も知的完成度が高く、今日の人類が日々の暮らしの中で、意識的にであれ無意識的にであれ縦横に享受している現代文明の礎を確立した文明（p13）」だと序章で簡明に、けれども正確に示した。

他にも重要な特徴として、イスラーム文明とギリシア文明の関わりが強調されていることが挙げられる。塩尻は「イスラームの支配者たちが、異なった民族や宗教の下で発展した科学であっても、人間の利益となる学術であれば、何でも受け入れるという寛容で現実的な姿勢（p35）」があったと説明し、プラトンが開設した研究所アカデメイアが529年にビサンツ帝国のユスティニアヌスによって閉鎖された際、古代ギリシアの文献がハッラーン（トルコ南東部）などに集められてシリア語に翻訳された話や、アッバース朝下のバグダードの学術機関「知恵の館」で古代ギリシアの写本がアラビア語に翻訳された事業なども詳説した。イスラーム政権下で保存されたギリシア文明の蓄積はルネッサンスに刺激を与え、さらに西欧が生み出した近代・現代先端科学文明へと連なっていく

た。つまり、イスラーム文明の存在抜きに、私たちは現在の生活を享受することはできないということである。

ところで、本書の構成は創意工夫や意外性に富んでいる。イスラーム文明が生み出した「技術」や「生活文化」ごとに、たとえば、第6章エレガンスと生活文化、第7章「鍊金術、数学、天文学」や10章「イスラーム芸術の世界——アラベスクと建築」といった項目ごとに並列に解説していくだけではなく、文明の発展や伝播に貢献した人々の経験やその時代背景が述べられている。たとえば、アンダルスで活躍した外科医のアル=ザフラーウィー、中世のヨーロッパで用いられた『医学大全』を書き中世のスコラ哲学に影響を与えた哲学者・医学者・法学者のイブン・ルシードなどの経験が丁寧に整理され、彼らと中世ヨーロッパとの関わりもわかりやすく説明されている。また、『三大陸周遊記』を完成させた旅行家のイブン・バトゥータ、シチリア王で神聖ローマ皇帝、ならびにエルサレム王でムスリムとキリスト教徒の共存を目指したフリードリヒ2世、そのフリードリヒに仕え『平面円形地図』を完成させた地理学者イドリスィーなども紹介されており、イスラーム文明の広がりを再確認できる。

個人的な意見をいえば、世界史をひととおり学んだ中高大生に本書を最も強く薦めたいと思う。実は、大学入学共通テストで世界史を選択した私の20歳の娘がテーブルに置いてあった本書を見つけ、評者よりも先に読了した。「センター試験前に読みたかった」と呟く娘に「どこが面白かったのか」と問うと、明時代の武将の鄭和の箇所だと言う。娘が使った世界史の教科書（山川出版社）では、鄭和について「(明の永楽帝が) イスラーム教徒の鄭和に命じ、艦隊を率いてインド洋からアフリカ沿岸まで遠征させた (p180)」、「艦隊は7回派遣された (1405年から1433年) (p180)」と簡潔に説明を行っている。鄭和は明軍が現在の雲南に侵攻した際に捉えられ連行されたいわば「征服された側」の武将で、以降、宦官として永楽帝に仕えたが、今まで娘はなぜ鄭和が永楽帝に従い長く辛い遠征を遂行できたのか、ずっと不思議に思っていたという。このたび、娘は鄭和の項のみならず本書を通読することにより、イスラームが他文化他宗教に対して寛容さを持っていたという歴史を再確認し、なぜ鄭和は永楽帝に従えたのか、永楽帝はなぜムスリムの鄭和を重用してもいいと思ったのか少しだけわかった気がしたという。

この感想を聞いて、評者はなぜ、今、塩尻がイスラーム文明について一般読者に向けてわかりやすく伝えようと思いついたのかとしばし思いを巡らせた。もしかすると、その答えは、本書の「はじめに」に書かれた「イスラーム文明の本来の姿を学び理解することは、今日の世界で必要とされる文明間の相互理解と、未来へむかって人類が生き延びていくための共存に関する必要不可欠なテーマ (p4)」という塩尻の言葉に全て集約されているのかもしれない。

近年、管見なイスラーム理解に基づくセンセーショナルな出版物や報道を目にする機会が多くなっている。それに反し、本書は豊かな知見を基に、限りなく広範囲に渡ってイスラーム文明に関する歴史的事実を丹念に拾い上げた労作となっている。塩尻は、イスラーム文明がアラビア語やイス

ラームの教えに従って伝承され、伝播した文明であったとしつつも、ギリシア文明を中心とする先行文明を受け入れ、またキリスト教徒やユダヤ教徒などが文明の発展に貢献した歴史的事実を丁寧に積み重ねて論じた。私たちが生きる現代日本も、人や物がグローバルな規模で頻繁に行き交う社会であり、もはや異なる価値観を持つ他者と共存していくことは避けられない。本書は、現代社会が発展し継続していくために、そして自らと異なる他者と平和に共存するための視座を改めて教えてくれる。

#### 参照文献

- 佐藤次高・鈴木薰編（1993）『都市の文明 イスラーム』講談社現代新書。  
小杉泰（2011）『イスラーム 文明と国家の形成』京都大学学術出版会。  
木村靖二・岸本美緒・小松久男ほか共著（2019）『詳説世界史』山川出版社。